

『落窪物語』における孝養譚の位相：北の方をめぐる最後の記述を起点として

梁, 丹
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1448715>

出版情報：語文研究. 115, pp.1-16, 2013-06-07. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『落窪物語』における孝養譚の位相

— 北の方をめぐる最後の記述を起点として —

梁 丹

一、問題の所在

王朝物語の登場人物中、『落窪物語』の継母北の方ほど気性が激しい人物もいないだろう。継子である落窪の女君を散々苛め、気に入らないことがあると、すぐ腹を立て悪口を言う。しかし問題なのは、このような性格は継子苛めを描く物語の前半部に限らず、十二分の孝養を描く後半部に於いても一向に直らない、という性格規定である。それを強調したいがごとく、物語の結末部には以下のような記述が用意されている。(以下、『落窪物語』の引用は、新日本古典文学大系(岩波書店・一九八九年)に拠る。傍線等は稿者による。以下同)

かく榮へ給をよく見よとや神仏もおほしけん、とみにも死なで七十余までなんいましける。大い殿の北の方、「いといたく老いたまふめり。功德を思ほせ。」との給て、尼にいとめでたくてなし給へりけるを、よろこびのたびいまずがりける。「世にあらん人、まゝ子にくむな。まゝ子なんうれしき物はありける。」との給て、又うち腹立ち給時は、「魚の欲しきに、われを尼になしたまへる。産まぬ子はかく腹ぎたなかりけり。」となんの給ける。死に給て後もたゞ大い殿のいかめしうしたまひける。(290―291頁)

北の方は嘗て継子である落窪の女君を散々苛めた報いで、一時は男君である道頼からひどく報復され、惨めな目に遭う。しかし最後は至れり尽くせりの孝養を受け、七十余歳ま

で長生きし、後世の功德のためを思った落窪の女君から、めでたく尼にしてもらおう。とうとう北の方は、「この世に生きている人は、継子を憎んではいけない。継子というものはありがたいものだったよ」と継子の徳を唱える。これでやっと悪玉として描き続けられてきた北の方も改心し、継子譚に付き物である「勸善懲惡」的な機能も果たされたかと思つたのも束の間、北の方に關する記述はさらに続き、傍線部の如く、またちよつとでも腹が立つと、「魚が食べたいのに、私を尼になさっているよ。自分が腹を痛めて生んでいない子は、こんなにも意地悪なものだったのだ」と悪口を言う。それでも、落窪の女君夫婦は北の方の死後の法要を厳かに執り行つた。

右の傍線部の記述に対し、従来の研究では、継母の自己中心的な性格の一貫性を示す一文として位置づけ、さらに三谷邦明氏は、「世にあらん人……」以下の叙述は、「この継子いじめは継母の性格によるといふこの物語作者の解釈が明記されている」^(註)箇所だと指摘する。確かにこのくだりの叙述をもつて、継母北の方は、徹頭徹尾悪玉で、常に腹を立て、意地悪なことを言う性格は終生直らなかつた、と説明することもできよう。しかしそもそも、なぜ継子を苛めても前非を悔悟しないような継母像を作る必要があつたのだろうか。また、当該箇所は本当に継子苛めの原因を明かすために用意さ

れた記述なのだろうか。さらには、継子苛めの原因が北の方の性格によるといふ解釈は果たして妥当であろうか。

小論では、北の方の僻み根性が最後まで直らなかつたことを示す結末部の記述に着目し、その意図の内実を分析する。具体的には、まず「魚の欲しきに、われを尼になしたまへる」という描写における「魚」の語の必然性を問ひ、次に「継母の腹ぎたなき」(『源氏物語』「蜜」)ならぬ、「産まぬ子は腹ぎたな」といふ見慣れない表現を検討する。これらを踏まえて北の方をめぐる最後の記述が意図するところを明らかにしたい。

二、「魚の欲しきに、われを尼になしたまへる」

北の方は、「産まぬ子はかく腹ぎたなかりけり」といふ表現を用いる根拠として、「魚の欲しきに、われを尼になしたまへる」と述べている。ここの「魚」と「尼」との関係について、三谷邦明氏は『新編日本古典文学全集』本の「解説」において、

優婆夷(在家の女信者)には、五戒(不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒)が課せられているので、生物

は食すことができなないので、こんな悪口になったのだ。
(367頁)

と指摘される。確かに「尼」になると、殺生が禁じられるので、「魚」が食べられなくなるが、しかしここが「魚」である必然性は果たしてあるのだろうか。つまり、なぜ「肉」とか他のものではなく「魚」と表現したのだろうか。このことについて少し考えてみたい。

殺生が五戒の中でも特に重んじられた戒律であることは周知の通りであるが、出家者が魚を食べると直ちに天罰が当たるのかといえ、そうでもない。事情によっては殺生を犯して魚を食べても罪にならない、ということを観わせる説話も見受けられる。『日本霊異記』（下巻）の「禪師の食はむとする魚の化して法華経と作りて、俗の誹を覆しし縁 第六」という霊験説話がそれに当たる。その説話の粗筋は以下のようである。（『日本霊異記』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館・一九九五年）に拠る。）

吉野山の山寺に住む大僧は、「身疲れ力弱りて、起居すること得ず。魚を食はむと念欲ひて」（260頁）、弟子に「我、魚を噉はむと欲ふ。汝求めて我を養へ」（同前）と言う。

弟子の童子は紀伊国の海辺に行き、「鮮ケキ鰯を八隻」（同前）を買って小櫃の中に入れて帰る途中に、知り合いの俗人の男三人に会う。櫃の中身を聞かれ、咄嗟に『法華経』と嘘をつくが無理矢理に櫃を開けさせられ、途方に暮れる。止むを得ず櫃を開けて見ると、魚は本当に「法華経八巻に化せり」（261頁）。俗人のうち、一人は不審に思い、密に童子について寺まで来て覗いて見ると、櫃の中の『法華経』は今度はまた生の魚に化していて、大僧はその魚を食べた。それを見た俗人の男は感服し、大僧を大師として供養するようになった。

この説話の結末文は、

当に知れ、法の為にすれば身を助くるといふことを。食物に於きては、雑毒を食ふと雖も甘露と成り、魚穴を食ふと雖も罪も非ず。魚化して経と成り、天感じて道を齊したまふ。此れも復奇異しき事なり（同前）。

と書かれている。僧侶が生物を殺して食べるのは世間から誹りを免れない行為である、という一般通念があり、童子は俗人達に櫃の中身を聞かれた時に嘘をついたのだろう。しか

し、大僧らに恥をかせないために、「天の守護」（同前）で櫃の中の魚が『法華経』八巻に化したことや、「当に知れ、法の為にすれば身を助くる」云々という叙述からして、出家者が魚を食べる行為は一律に批判されるわけではなく、病氣治療等のためには許される行為であった、と解釈することもできよう。猶、本話は『三玉絵』（巻中・十六話）や『今昔物語集』（巻第十二・二十七話）、『本朝法華験記』（巻上・十話）、『宝物集』（巻九）、『元亨釈書』（巻十二感進篇・四ノ四）等にも、同話もしくは類話が見られる有名な話である。

ところで、「魚」が作品構成の重要な要素として登場する物語に『うつほ物語』の「俊蔭」巻が挙げられる。俊蔭の死後、俊蔭女の暮らしは零落する一方で、大勢いた使用人たちもほとんど去り、屋敷内に残って面倒をみてるのは嵯峨野という老女（乳母の召使）だけである。しかしこの老女も仲忠が五つになる秋に死に、母子の生活は困窮極まりなく、餓死の寸前まで追い込まれた。このような二人が兼雅に再び出逢うまでの七年間を凌ぐことができたのは、なんとといっても仲忠の孝心があったからである。仲忠はわずか五歳であるにも関わらず、母親を養おうという思いをめぐらす、その最初の行いが河原で魚を釣ることである。河で釣った魚で、しばらくの間、二人の食物はなんとか維持できたが、冬

になり寒くなるにつれ、河面が凍って、魚が取れない。このことを泣き悲しむ仲忠の身に奇瑞が起こる。そのくだりは以下のように書かれてある。（以下、『うつほ物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館・一九九九―二〇〇二年）に拠る。）

「まことにわれ孝の子ならば、氷解けて魚出で来。孝の子ならずは、な出で来ぞ」とて、泣くときに、氷解けて、大いなる魚出で来たり。取りて行きて母にいふやう「われはまことの孝の子なりけり」と語る。（73―74頁）。

右の叙述からも分かるように、奇瑞が起こったのは仲忠が「孝の子」であるためである。「俊蔭」巻の前半で、俊蔭一家の繁栄は琴の功德により仏陀によって約束され、これは殊に孫仲忠の幸運の予言でもあり、仲忠が将来出世するのは物語の経の構想であり、必然的な結果であろう。しかし、敢て幼少期の仲忠に試練が与えられたのは、仲忠の人物規定に関わるものではなからうか。つまり、真冬に魚を釣るといふことや、それに続いて引き起こされる、雪に降り積もられて在り場所が分からぬ芋等を得ること、熊から老杉のうつほを譲ってもらうこと等の一連の奇瑞は、仲忠の「孝の子」としての人物規定に因るものであり、「寒冬求魚譚」をはじめとする、これ

らの一連の奇瑞譚は、「孝子仲忠像」の造形に効果的に用いられている。

さて、仲忠の物語にみられるこれらの奇瑞譚が漢文資料から取材したことは、諸先学によつて指摘され、広く知られているところである。^{〔注3〕}真冬に魚を釣る話は「王祥譚」から、雪に降り積もられて在り場所が分からぬ芋等を得る話は「孟仁譚」から、熊から杉のうつほを譲ってもらふ話は「楊威譚」から素材を得、それらを翻案したものと云われる。これらの話は中国の孝子説話の中でもよく知られたものであるが、奈良時代には既に日本に将来したとされる『孝子伝』^{〔注4〕}には揃つて所収されている。猶、『孝子伝』においては、「孟仁譚」(26話)、「王祥譚」(27話)に続いて「姜詩譚」(28話)を載せるが、この三話はある共通のモチーフのもとに意図的に配列されている。以下、仲忠孝養譚の内容により近いとされる船橋本『孝子伝』によつてその内容を示す。(本文の引用及び書き下し文は、幼学の会編『孝子伝注解』(汲古書院・二〇〇三年)に拠る。但し、書き下し文は私見によつて改めた箇所がある。)

● **孟仁**、江夏人也。事母至孝。母好食笋、仁常勤供養。冬月無笋。仁至竹園、執竹泣。而精誠有感、笋為之生。仁採供之也。

孟仁は江夏の人なり。母に事へて至孝なり。母笋を食すること好み、仁常に勤めて供養す。冬月笋無し。仁竹園に至り、竹を執りて泣く。而して精誠感有り、笋が為めに生ふ。仁採りて之を供するなり。

● **王祥**、者至孝也。為呉時司空也。其母好生魚、祥常勤仕。至于冬節、池悉凍、不得要魚。祥臨池叩水泣。而水碎魚踊出。祥採之供母。

王祥は至孝なり。呉の時の司空と為るなり。其の母生魚を好み、祥常に勤仕す。冬節に至り、池悉く凍り、魚を要むるを得ず。祥池に臨み水を叩きて泣く。而して氷砕け魚踊り出づ。祥之を採りて母に供す。

● **姜詩**、者広漢人也。事母至孝也。母好飲江水。江去家六十里、婦常汲供之。又耆魚膾。夫婦恒求供之。於時精誠有感、其家庭中、自然出泉、鯉魚一双、日々出之。即以此常供。天下聞之。孝敬所致、天則降恩、甘泉涌庭、生魚化出也。人之為子者、以明鑑之也。

姜詩は広漢の人なり。母に事へて至孝なり。母江水を飲むを好む。江、家去ること六十里、婦常に汲みて之を供す。又魚膾を耆む。夫婦恒に求めて之を供す。時に精誠感有りて、其の家の庭中に、自然に泉出で、鯉魚一双、日々に之出づ。即ち此れを以つて常に供す。天下之を聞く。孝敬の致る所、天則ち恩を降

し、甘泉庭に湧き、生魚化出するなり。人の子爲る者は、以つて明らかかに之に鑑みよとなり。

これら三話は、「至孝」の表れとして母親のために何かを求め（真冬に「魚、筍」を求めたり、毎日「江水」や「新鮮な魚」を求め歩く）奇瑞によつて実現する、という共通のモチーフを有する話群で、意図的に前後に配列されている。「母好食魚」や「母好食筍」等のフレーズを含む孝養奇瑞譚は、インパクトが強く、加えて日本でも愛読された『蒙求』（「王祥守柰」等）にも収録されたこともあり、平安時代の人々の間でも広く知られた説話であつただろう。だからこそ『うつほ物語』の作者も、「孝の子」仲忠を造形する時に、これらの話を活用したのではなからうか。

ところで、『落窪物語』において、「魚」は該当箇所以外、もう一箇所その用例が見られる。

くる、戸の廂二間ある部屋の、酢、酒、魚などまさなく
したる部屋の、たゞ豊一ひら口のもとにうち敷きて、
……（86頁）

右は、落窪の女君が北の方の企みで北の部屋に籠められる

場面であるが、北の部屋の中には、酢、酒、魚などが置かれている。このことから「魚」は北の方一家に常備された食物であることは分かるが、しかし、だから尼にされた恨みを言う時に反射的に口に出したのが「魚」であつた、と結び付けるわけにもいくまい。「魚の欲しきに、われを尼になしたまへる」という表現を見て、読み手が直ちに卷一の当該箇所を思い浮かべ、納得することができたとは、にわかには考え難いのである。むしろ「母好食魚」という表現を含む「王祥譚」やそれを翻案したとされる仲忠の孝養譚を下敷きにした表現なのではないだろうか。すなわち、「実母のために、真冬でも魚や筍を求め歩く孝子（中国の孟仁、王祥、姜詩や日本の仲忠）もいるのに、魚を食べさせまいとして、自分を尼にした落窪の女君は親不孝である、と北の方が捻くれたことを言った」と解釈することはできないだろうか。だからこゝは、「肉」など別の食物ではなく、端的に「魚」という語を用いたのではなからうか。こう考えてこそ「魚」の必然性も納得できる。

三、「継母の腹ぎたなき」と「産まぬ子は腹ぎたなし」

次に、「産まぬ子はかく腹ぎたなかりけり」という表現について検討する。まず、「腹ぎたなし」という表現の一般的な用

法を確認しておこう。

A かくて、宮に典侍の申したまふ。「いと腹汚く、幼くおはします。これは何の罪にてある御心地にもあらず。知らせてまつりたまはねば、おとどは騒ぎたまふ。……」

〔うっほ物語〕「国讓中」・③184頁

B (宮司)「いとあやしかりける事かな。今はみな乗りたまひぬらむとこそ思ひつれ。こはなどかうおくれさせたまへる。今は得選乗せむとしつるに。めづらかなりや」など、おどろきて寄せさせれば、(清少納言)「さはまづその御心ざしあらむをこそ乗せたまはめ。次にこそ」と言

ふ声を聞きて、(宮司)「けしからず、腹ぎたなくおはしましたしけり」など言へば、乗りぬ。(注)〔枕草子〕第二六〇段・402 - 403頁

C ほどなく明けゆくにやとおぼゆるに、ただここにしも、「宿直奏さぶらふ」と声づくるなり。またこのわたりに隠ろへたる近衛官であるべき、腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかし、と大將は聞きたまふ。をかしきものからわづらはし。ここかしこ尋ね歩いて、「寅一つ」と申すなり。(注)〔源氏物語〕「賢木」・②105頁

Aは、仲忠が忠こそを呼び、女一の宮のために加持を頼む場面である。典侍は女一の宮が妊娠のことを仲忠に知らせず心配させるのは「いと腹汚く、幼」と言う。

Bは、中宮様が内裏から二条の北宮へ行啓された夜、清少納言がほかの女房達よりも乗り遅れたことに気付いた宮司は、「どうしてこんなに遅れたのですか。(みなさん、もう乗られて)今は得選(御厨子所の女官)を乗せようとしたのに」と驚いて車を寄せさせると、清少納言は、「それではまず得選達を乗せてください。私たちはその次にでも」と言う。それを聞いた宮司は、「けしからず、腹ぎたなくおはしましたしけり」と言う。

Cは、光源氏が朧月夜と密会する場面である。光源氏は、わざわざ宿直奏の者たちに近衛官の居場所を教えて、他人の忍びの恋の秘密をあばきたてて興じようとする連中は「腹ぎたな」と思う。

これらの用例から、「腹ぎたなし」とは「意地が悪い。心持ちが素直でない。腹が黒い」等の意味で使われる表現であることが分かる。

次に「継母の腹ぎたなし」もしくは、継母に対して「腹ぎたなし」という表現が用いられる用例について検討する。すでに思い浮かぶのは、『源氏物語』「蛸」巻の例である。

継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける。〔源氏物語〕「蛩」・③16頁

(ア)は、物語の是非を評する『源氏物語』においても有名な場面である。光源氏は紫の上と明石の姫君が継母子関係にあることを配慮し、継母が意地悪く継子を苛めるような「継母の腹きたなき昔物語」は、紫の上にとっては不都合なことだろうと憚って、物語の内容を厳選し、清書させ、絵等を描かせる。「継母の腹きたなき昔物語」について、『新編日本古典文学全集』本の頭注では、『落窪物語』や『住吉物語』など、継子苛めの類型的な物語をいう(216頁)と指摘する。また当該箇所の記事から、継母が継子を苛める物語が当時数多く存在し、広く読まれていたことを示唆するとも言われている。確かに、『源氏物語』以前に成立したとされる古本『住吉物語』も『落窪物語』も内容そのものは、継母が継子を苛める腹きたなき物語である。しかし両者とも、「継母の腹きたなき」もしくは継母に対して「腹きたなし」という表現を用いていない。現存する『源氏物語』以前の物語では、唯一『うつほ物語』の「忠こそ」巻に、該当する用例が見受けられる。

(イ)「たれもたれも、親にはものしたまへど、小さきとき

は、女親のごとはあらぬものなり。よしいかがはせむ。おのれに代りて、腹汚き人につきて、あしき目見せたまふな。腹汚き人ありてあしきこと聞こゆる人ありとも、いはむ人の罪になしたまへ。すべてわが子のため、あしからむことをば、水の上に降る雪、砂子の上に置く露となしたまへ」と聞こえ置きて、隠れたまひぬ。〔うつほ物語〕「忠こそ」・①211頁

(イ)は、橘千蔭の北の方の遺言である。忠こその実母は臨終に際し、わが子の身の上を案じ、千蔭に右のようなことを遺言して亡くなるが、物語はこの遺言が破られる形で展開される。実母は遺言の中で、「私に代わって腹汚き人を迎え、この子に可愛いそうな目を見せないでください。もし腹汚き人がいて、忠こそのために悪いことを耳に入れるようなことがあっても、そんなことを告げ口するほうが悪いのだとお思ってください」と言う。しかし、千蔭は一条北の方の所に通い、その讒言で、ついに父子の間には隔たりが生じ、忠こそは出家して姿をくまらず。後日、千蔭は帝に召され、石帯の紛失の一件をはじめとして、いろいろ不審なことも企んだのは、あ的一条北の方の仕業であることを知ることになる。千

蔭は「腹汚きくことも、返す返すのたまひけり」(同前・245頁)云々と、先妻の遺言を破つたことを痛恨するが、その後悔の場面に「腹汚きくこと」という表現は又も用いられる。有らぬ事を讒言し、千蔭親子の仲を裂かせ、忠こそを出家へと追い込んだ継母一条北の方はまさしく「腹汚き人」である。

(ウ)「……かかることなむあると、かしこに語らむと思へど、かかる仲らひを、昔より腹汚きものに人のいへばあぢきなくてなむえものせぬ。君やは忠こそが帝にかう奏したるやうに告げたまはぬ。」(同前・230頁)

(ウ)は、一条北の方が祐宗(亡き左大臣の甥)を呼び、再度、忠こそを陥れる奸計をめぐらす場面である。一条北の方は祐宗に、「忠こそが自分に異常な感情を持っていて、そのため帝に讒言し、父大臣を罪に陥れ左遷させようと企んでいる。このことを直接に千蔭に伝えたいが、「かかる仲らひを、昔より腹汚きもの」と人々が言っているので、誤解されるのがいやで知らせることができない。あなたが大臣に忠こそその悪企みを知らせなさい」と言う。「かかる仲らひ」とは、当然「継母と継子の間柄」を指すものであるが、現存する「継子物」を見る限り、悪者は常に継母のほうであり、「腹ぎたな

し」とされるのは継母を指すことである。こうしてみると、『うつほ物語』の忠こそ物語において「腹ぎたなし」は、あたかも継母専用の形容であるかのように使われているが、この点については既に注釈書にも指摘が見られる^(注8)。加えて、先述の如く、現存する日本の文学作品を見る限り、継母に対して「腹ぎたなし」と表現したのは『うつほ物語』が初めてであり、『源氏物語』の「継母の腹ぎたなき昔物語」という表現も『うつほ物語』を踏まえた可能性が考えられる。

ところで、『うつほ物語』の「かかる仲らひを、昔より腹汚きもの」云々の「昔」とは、どのような作品を念頭に置いた表現なのだろうか。散逸してしまった日本の文学作品も多一中、枠組みとして「継子苛め譚」を取り入れた物語を『うつほ物語』の忠こそ物語や古本『住吉物語』、『落窪物語』以前に遡ることはできない。一方、中国には、『孝子伝』所収の「伯奇譚」や「閔子騫譚」等をはじめとする、継母による継子苛めをモチーフにした説話も多くみられる。特に、継母の讒言により父子の仲に亀裂が生じ、それを悲観した男主人公伯奇が家出をし、死んで鳥となつて継母に復讐した、という「伯奇譚」は、忠こそ物語のプロットに大きな影響を与えた説話ともいわれているが、「かかる仲らひを、昔より腹汚きもの」と言う叙述は、これら中国の継子苛め説話を念頭におい

た表現なのではなからうか。

最後に『落窪物語』における用例について検討する。『落窪物語』内で、「腹ぎたなし」という表現は計四回用いられているが、侍女あこきと継母北の方が二回ずつ使用している。まず、あこきの用いた例について検討する。

① 帯刀、あこきを、「まいりて申給へ。」と言へば、「よべはまいらで、けさまいらん、げにまるが知りたる事とこそ思ほさめ。はらぎたなく、人に疎ませたてまつること。」と怨ずる……（29頁）

② あきき、返りこと書く。「いでや、心づきなく。こは何ごとぞ。よべの心はかぎりなくあいなく、心づきなく、腹ぎたなしと見てしかば、いま行さきもいと頼もしげがなく。なん。……」（32頁）

①と②は、いずれもあこきが夫の帯刀に対して使う表現である。中納言一家が石山詣でに大勢で出かけた夜、少将道頼は雨の中に中納言邸を訪れ、落窪の女君を垣間見し、その美しさに魅せられ、帯刀の手助けで落窪の女君と無理矢理に契り一夜を過ごす。あこきは女君のピンチに気付きながらも、帯刀の妨害で、道頼の侵入を阻止することができず、そのこ

とで帯刀を恨む。次の日、帯刀はあこきに姫君の部屋に行くよう勧めるが、あこきは、「昨日の夜は（姫君の所に）行かず、今朝行ったら、本当に私が知っていた事になり、わざと姫君に私を厭わせようとするあなたは「腹ぎたな」い」と言う。

次の日、少将の後朝の文とともにあこき宛てに帯刀の手紙が届くが、「昨日のことは事前に少しも知らなかったのに、あなたから散々に恨まれるのは心外だ」と書かれてあった。あこきはその返事に「昨日のことは、このうえなく不愉快で、あなたは「腹ぎたな」い人だ」と言う。この二例は、あこきが心の底から帯刀を恨んでの表現ではなく、道頼の手助けをしながらも、まるで知らん振りをする帯刀の仕打ちに腹を立てる表現である、あこきは帯刀を「意地が悪い」と非難するが、この二例は、前述の用例AとCと同様の使い方である。

次に、継母北の方が用いた「腹ぎたなし」について考察する。

③ 母北の方、「われやはこの事はせし。左の大きい殿のしたまひしかば、かなしきめを見せ給はんとて、腹ぎたなきわざをしたまへるなりけり。何かうれしと思ひけん。……」

（283頁）

④ 「世にあらん人、まゝ、子にくむな。まゝ、子なんうれしき物はありける。」との給て、又うち腹立ち給時は、「魚のほしきに、我を尼になしたまへる。産まぬ子はかく腹ぎたなかりけり。」となんの給ける。死に給て後もたゞ大い殿のいかめしうしたまひける。(290—291頁)

③は、四の君が権帥と再婚して筑紫に下るに際し、北の方が四の君との別れを惜しむ場面である。四の君と権帥との再婚話を取り沙汰された時、北の方は、「わがなからん間、かくてのみあるを、うしろめたなし、たゞの受領のよからんをがなどこそ思ひつるに、ましてかんだちめにあなり、いとくうれしきことなり。」(260頁)と、四の君の再婚話を喜ぶ。しかし一方では、「かくこまかにうしろ見るがあわれなることをぞ。女君より殿こそ御心ばへあわれなれ。」(同前)と、依然として落窪の女君の好意を認めようとし、捨くれたことを口にする。四の君の再婚をはじめ、道頼が北の方腹の子女の世話をするのは、落窪の女君を熱愛する故であることは自明のことであり、北の方もこのことを知らないわけがないのに、どうしても素直に認めようとし、しない。しかしこのよな北の方でも落窪の女君の孝養ぶりには感服せざるを得ない。北の方が権帥の邸に赴いて行くに相応しい衣服がないこと

を歎いている時に、そのことを察した落窪の女君が、いろいろと素晴らしい衣装を仕立てて贈ってきた。北の方は、上機嫌になり、「人は産みたる子よりもまゝ、子のとくをこそ見けれ。」(276頁)と称揚するばかりか、「いやくまゝ、このとくをなん見る。さ知りたまへれ。此あんなる子ども、ゆめくにくみ給な。をのが子どもよりもかなしうしたまへ。をのれはむかしにくまざらましかば、しばしにても恥を見て、いたきめは見ざらまし。」(278頁)と言ひ、権帥の先妻の子供達によくするように四の君を戒める。しかし、それも束の間で、いざ四の君が筑紫に下るとなると、「七十にわれはなりなんず。いかでか六七年生けらんとする。あひ見で死なんこと。」(282頁)と泣き喚きながら別れを惜しみ、四の君の再婚は「自分たちに悲しい思いをさせるために、左の大い殿(道頼)がした「腹ぎたなき」仕業である」と放言する。「道頼」を名指しているが、真の攻撃の標的は落窪の女君であり、北の方は一方では「継子の徳」を唱えつつも、もう一方では「腹ぎたなき」継子であると罵倒する。北の方のこのような矛盾する言動の繰り返しは物語の最後の場面でも語られる。

④は、先にも引用したが、物語の終わりに描かれた北の方に関する最後の叙述である。「又うち腹立ち給う時は」という表現を境に、「世にあらん人」云々の箇所と、「魚の欲しきに」

云々の箇所とが対照的に描写されているのは一目瞭然である。北の方の子息達は落窪の女君夫婦の恩恵で、それぞれ出世し、自分も七十歳まで長生きする。そのうえ、後世の功德のために、立派な作法で尼にしてもらったので、落窪の女君に対する感謝の気持ちは言いようもない。北の方は、「世にあらん人、まゝ子にくむな。まゝ子なんうれしき物はありける」と「継子の有難さ」を讃える。しかし、ちよつとでも気になわない事があると、「魚が食べたいのに我を尼になさった。自分が腹を痛めて産んでいない子は、こんなにも「腹ぎたないものだった」と悪口をいう。「産まぬ子」とは当然「継子」のことであり、継子は「腹ぎたない」と言う。

このように、継母北の方の表現に見られる「腹ぎたなし」はいずれも落窪の女君に向けられたものであるが、しかし一方では女君の「まゝ、子のとく」が強く意識される文脈で使われ、実に興味深い。「継母の腹ぎたなき物語」は、中国の「伯奇譚」や「閔子騫譚」、日本の忠こそ物語などを通して平安時代の人々にも馴染み深いものであったのに対し、「継子の腹ぎたなき物語」の如きは、絶えて見られぬものであることからも、「産まぬ子は腹ぎたなし」という奇異な表現は、「継母の腹ぎたなし」を意識し、アレンジした表現であると考えられる。

さて、前節では、「魚の欲しきに」云々が、孝養奇瑞譚（「王祥譚」や「仲忠物語」を念頭においた表現であることを明らかにしたが、それに続く「腹ぎたなし」が、「継子の孝行の徳」を唱える文脈を伴うものであることと考え合わせると、継母北の方についての最後の叙述は、以下のように解釈することができるとはないだろうか。つまり、「落窪の女君は親に孝行を尽くす実子（王祥や仲忠等）」とは違う継子である。だから、母のために真冬に魚を釣るところか、自分は魚が食べたいのに尼にした。世間では、継母は腹がきたない（意地が悪い）というが、継子（落窪の女君）こそこんなにも腹がきたないものだった」と。このような考えは実に理不尽かつ強引であるが、偏屈者である継母なりの論理としては、筋が通っているとやるのではなからうか。このように考えることで初めて、「尼」と「魚」の組み合わせも、「産まぬ子は腹ぎたない」と言う特異な物言いも納得できる。

四、結び

通常「継子譚」においては、継子昔めとその救出までが物語の大枠をなし、「孝養譚」は後日譚として付け加えられるに過ぎない。しかし『落窪物語』においては、「孝養譚」にかな

りの筆が費やされ、やや冗長の感を否めない。しかしそれは、『落窪物語』をあくまでも「継子苛め譚」という枠組みで考えたことによる「余り」なのであり、全体の三分の一弱を占める「孝養譚」を、当初から意図された、物語を構成する重要な骨格と考えると、別の視点が開けてくるのではなからうか。(註12) 卷三の半ば以降の「孝養譚」は、それまでに殆ど活躍することがなかった主人公である継子落窪の女君の中納言一家への孝養や恩恵に関わる記述と、その孝養や恩恵に対する継母北の方の称揚（継子の徳）と罵倒（腹ぎたなし）に関する記述の反復で構成されている。北の方の是非を悔悟しないような言動は物語の終盤まで続き、一見それは北の方の邪悪な性格の一貫性を示すような叙述にも見受けられるが、しかしそれらの言動が常に「継子の徳」を強調する文脈と共存することを考慮すると、北の方の悪口は、裏を返せば「継子の孝行の徳に対する讚美」ではなからうか。本物語において「継子」という表現は四例見られるが、「ま、子のとく」（二例）、「ま、子にくむな」「ま、子なんうれしき物」その全てが北の方による落窪の女君の徳を唱える場面に用いられていることが、なによりもこのことを物語っているように思われる。

『落窪物語』は、幼くして実母に死なれ、実父の愛情も薄く、継母に散々苛められる継子が、太政大臣の北の方にまで

出世する「さいはひ」を手に入れる、という筋書きであるが、継子である落窪の女君がこのような幸運を手に入れる事が出来たのは一体何故だろうか。実母の霊の守護も長谷寺観音の霊験も登場しない本物語において、落窪の女君に賦与されたのが、「継子の孝行の徳」だったのではなからうか。(註13) 中納言が落窪の女君に対して薄情とはいえ、実父である以上、子として孝養を尽くすのは人情の自然であり、これだけでは「孝の子」とは言えないだろう。むしろ、嘗ては残忍な継子苛めを行つた張本人であり、自己中心的でひねくれ者である継母北の方までもが、継子である女君の徳を認めざるを得ないところまで書き続けられた「冗長」な孝養譚こそが、「継子の孝行の徳」を立証するための叙述なのではなからうか。北の方の屈折した性格規定は、継子苛めの場面においては理不尽な継子苛めを遂行する原動力であったが、継子による孝養の場面においても落窪の女君の「孝行の徳」を引き立てる力になっているのではないだろうか。

ところで、孝子説話の中には「継子の孝」をモチーフとする話もいくつかみられ、中でも、中国五帝の一人とされる「舜」に纏わる説話——「帝舜譚」（舜は実父や継母らに殺される寸前にまで苛められるが、そんな父親や継母に対しても終始孝行を尽し、その「孝心」が貴ばれ、堯から帝位を譲られた、という説話）と、孔子の

弟子の中でも顔回と並ぶ徳行の関子騫に纏わる説話——「関子騫譚」（子騫は、継母から真冬に実子よりも粗末な薄い服を着せられる等の苛めを受けるが、父親がそれを悟り継母を追い出そうとしたのを止めた、という説話）は、中日ともに数多くの文献に収録された著名な説話である。^{〔注1〕}『落窪物語』の作者は、これら「継子の孝行の徳」を唱える孝子説話から示唆を受け、そのプロットを真中に取り入れたのではないかと考えられるが、この点については稿を改めて解き明かしたい。

注

注1 新大系本『落窪物語』においては、「うち腹立ち給時」の脚注に、「継母北の方の腹立ちちは終生直らない性格的なものであったことを示す」とあり、「産まぬ子はかく腹立たなかりけり」の脚注に、「逆恨みを言う癖を継母北の方が終生変わらなかつたことを知らせる一文」とある。一方、新編全集本『落窪物語』（小学館・二〇〇〇年）においては、「うち腹立ち給時」の頭注として、「腹が立つと感情のおもむくままに行動する北の方の性格が最後まで一貫」していると指摘される。

注2 新編全集本『落窪物語』三四二頁、頭注参照。

注3 『うつほ物語』仲忠の物語の典拠書を『二十四孝』とする説は、河野多麻氏による岩波文庫（一九五七年）の脚注以来、注釈書においてはしばらく踏襲されるが（角川文庫本〈原田芳起校注・一九六九年〉や校注古典叢書本〈野口元大著・一九六九年〉）、『二十四孝』は『うつほ物語』よりもかなり後の成立で、典拠書とする説は妥当ではないとされる。一方、今野達氏は

注4

「古代・中世文学の形成に参与した古孝子伝二種について——今昔物語集以下諸書所収の中国孝養説話典拠考——」（『国語国文』二七巻七号・一九五八年七月）で、仲忠の物語の典拠書は『孝子伝』であると立証されたが、この説は広く知られ、今となっては定説となっている。阿部恵子氏は「仲忠孝養譚について——その出典及び俊蔭巻での構想上の位置——」（『実践国文学』三三号・一九七三年三月）で、現存する二種の『孝子伝』（陽明本と船橋本）のうち、「仲忠孝養譚の出典書としては船橋本系孝子伝、出典書としては王祥・孟仁・揚威の各孝養譚が最も妥当であると考えられる」と説く。又、山本登朗氏は「親と子・宇津保物語の方法」（『ことばとことのは』森重先生喜壽記念）所収、和泉書院・一九九九年）で、『孝子伝』は仲忠孝養譚の出典書であることを認めた上で、仲忠孝養譚においては『孝子伝』の「孝」という概念に、さらにそれとは異なる「親子の愛しさ」という人間的感情が作者によって意図的に付け加えられ、それが全体に共通する主題をなす、と指摘される。日本に伝存する陽明本『孝子伝』（鎌倉頃の書写）と船橋本『孝子伝』（天正八（一五八〇）年の書写）は、散逸を免れて現在に伝わる唯一の完本であるが、日本への将来時期については、『陽明本』は天平五（七三三）年以前、「船橋本」は文武四（七〇〇）年頃と言われる。詳しくは以下の論文を参照。

- ①西野貞治「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」（『大阪市立大学大学院文学研究科 人文研究』七巻六号・一九五六年七月）
- ②今野達「古代・中世文学の形成に参与した古孝子伝二種について——今昔物語集以下諸書所収の中国孝養説話典拠考——」（『国語国文』二七巻七号・一九五八年七月）

③黒田彰『孝子伝の研究』所収「船橋本孝子伝の成立——その改修時期をめぐって——」（思文閣出版・二〇〇一年）

④東野治之「那須国造碑と律令制——孝子説話の受容に関連して——」（『日中律令制の諸相』、東方書店・二〇〇二年）

注5
⑤幼学の会編『孝子伝注解』「略解題」（汲古書院・二〇〇三年）
本文の引用は、松尾聡・永井和子校注『枕草子』（新編日本古典文学全集、小学館・一九九七年）に拠る。

注6
本文の引用は、阿部秋生・秋山慶・今井源衛・鈴木日出男校注『源氏物語』（新編日本古典文学全集、小学館・一九九四〜一九九八年）に拠る。以下同様。

注7
『吉古物語』においては、「継母の腹ぎたなし」、もしくは、継母に対して「腹ぎたなし」と用いる表現は見られず、継母と住吉の姫君の険しい継子関係は、「昔も今もまことならぬ親子のなか」（父中納言の心中思惟の詞）や「今も昔も、誠ならぬ親子の有様のゆゑ、しさよ」（尼君の詞）等と表現される。『落窪物語』においては、「腹ぎたなし」は四例みられるが、いずれも継母に向けられる表現ではない。

注8
新編全集本「源氏物語」「忠こそ」巻の頭注に、「腹ぎたなし」は「継母の形容として頻繁に用いられる」とある。

三木雅博氏は「『うつほ物語』忠こそ（継子いじめ譚）の位相——『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較考察から——」（『国語国文』七三巻一号・二〇〇四年一月）という論考において、忠こそその物語に『孝子伝』所収の「伯奇譚」が踏まえられたことを論じ、以下のように結論づけられる。

以上、「うつほ」作者は、『孝子伝』に孝養奇瑞譚と（継子いじめ譚）とが併せて載せられていることに注目して、仲忠の物語と対比させるべく、忠こそその物語の基本的な構想

を『孝子伝』の伯奇譚に仰ぎながら、さらに平安前期当時の貴族社会の家族関係を見据えて、継子迫害の要因の部分については、インド起源のクナラ太子譚の、継母の邪恋の語形を用いていたのではないかという仮説を展開してみた。（傍線稿者）

注10
新大系本は、底本（九条家本）通りの「はぢぎたなく」の本文になっているが、その他の諸注釈書は「はらぎたなく」と本文を改訂することが多い（校注古典叢書本〈底本—桃園文庫旧蔵東海大学図書館蔵藤原福雄奥書本〉、角川文庫本〈底本—宮内庁書陵部蔵本〉、新編日本古典文学全集本〈底本—実践女子大学常磐文庫本〉）。

また、「はらぎたなく」の本文を有する写本（三手文庫蔵本・柏亭真直書写本〈新潮日本古典集成本の底本〉）や刊本（寛政六年の木活字本〈日本古典文学大系本の底本〉）もあり、さらに「はぢぎたなく」が他作品にも用例を見ないことを考慮し、新大系本の本文を「はらぎたなく」の誤りと解する説に従い改訂する。

注11
「殿も北の方をいみじう思ひきこえ給ふあまりのまろ（四郎）までは来るぞ……」（261頁）、という叙述からも十分に読み取れる。

注12
本物語の「孝養譚」が他の継子物に比べて大きくクローズアップされていることに着目し、それを作者による創意として積極的に認めようとする論考も見られる。

上坂信男氏は、「落窪物語の方法」（『国文学研究』二二巻・一九六〇年十月。後『物語序説』（有精堂・一九六七年四月）に収録）において、「孝養譚」を作者の構想圏内のものであると肯定的に捉えるが、しかし「報復譚」こそが作者の独創だと高

く評価し、「孝養譚」は「報復譚」をめぐる後始末的な役割として論ずるに止まる。さらに、「報復譚」と「孝養譚」が異常に長いのは、古本「住吉物語」という先行作品を克服するための作者の工夫だと述べられる。

小山利彦氏は、「落窪物語」の構造——報復譚と出世譚を軸に——（論集中古文学²『初期物語文学の意識』（笠間書院、一九七九年）収録）において、『落窪物語』の報復譚と孝養譚は獨創性があると評価するが、しかし落窪の女君の出世という結末をも含め、そこには「極端な権力志向が窺える」とし、「この王朝政治体制に基づいた権力第一主義はこの物語の思想の一つ」であると結論付ける。

注13

『落窪物語』に「徳」と「さいはひ」という表現が多用されていることに注目し、それらの用例を検討した論考に石原昭平氏の「『落窪物語』——徳孝と「さいはひ」を語る——」（国文学解釈と鑑賞・五九卷三号・一九九四年三月）がある。石原氏は、結論として、「継子の徳」も女君の「さいはひ」も現実にはありえない、「それごと」を以て語る物語の世界でしか実現できない理想論で、この理想論を語るからこそ作者の狙いであるとする。継子の「徳孝」と女君の「さいはひ」の関連性や、孝養譚における継母の位置づけなどについてはほとんど論じられず、また、女君の「さいはひ」という結末をあくまでも摂関政治体制における道頼の権力と愛情（現実にはあり得ない一夫一妻の主張）によると論ずる。

注14

「帝舜譚」は、中国においては、『孟子』（万章）、『史記』（五帝本紀）、纂図附音本『注千字文』（23・24句注）、『孝子伝』（1話）等等、数多くの文献に記載され、日本においては、『東大寺諷誦文稿』（89行）、『日本感霊録』（11）、『三教指帰』（成安

注下、覚明注五）、『注好選』（上46）をはじめ、それ以降の多くの文献に収録されている。一方、「閔子騫譚」は、中国においては、『韓詩外伝』（類説三十八所引）、『説苑』（芸文類聚二十所引）、『蒙求』（閔損衣草）、『孝子伝』（33話）等々の文献に見られ、日本においては、『注好選』（上47）、『沙石集』（三下）、『内外因縁集』等々の文献に所収されている。

【付記】

小論は、第三十一回古典研究会（平成二十四年十二月二日、於福岡大学）での口頭発表の一部に基づくものである。席上ご教示賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

（りょう たん・本学大学院博士後期課程）